

# 釜ヶ崎地区在住のホームレス経験者に対する 社会生活技能訓練（SST）実践報告

Practice Report of Social Skills Training (SST) for Person Who Have Experienced Homeless  
in Kamagasaki Area

瀧尻 明子<sup>1)</sup>

Haruko Takijiri

松本 裕文<sup>2)</sup>

Hirofumi Matsumoto

## 要 旨

西成区釜ヶ崎地区には、ホームレスやその経験者が多数居住している。ホームレスは何らかの障害を抱えた人の割合が高く、そのため仕事や対人関係でトラブルを抱えやすく躓きがちである。釜ヶ崎に居住するホームレス経験者に対して、2013年より社会生活技能訓練（SST；ソーシャルスキルトレーニング）を開始した。本稿では、4年目に入るこの活動を3つの時期に分けて報告した。1期では就労を目指す若年ホームレス経験者を対象として土曜日の夜に行い、主に職場での人間関係上の課題を取り上げ、参加者間でロールプレイや意見交換を行った。参加者の言動が、攻撃的な人は和らぎ、自閉的な人は発言が増えるなどの変化が見られた。2～3期は単身高齢生活保護受給者を主な対象として、地域生活で起こりがちな近所とのトラブル、訪問セールスの断り方などを課題として取り上げた。少しずつ形を変えつつ、参加者の要望に応じて現在も存続している。

キーワード：釜ヶ崎地域、ホームレス、生活保護、単身者

Key words：Kamagasaki area, Homeless, Public assistance, Single person

## I. はじめに

大阪市立大学看護学科の学舎から15分ほど西に歩くと、西成区釜ヶ崎地区（萩ノ茶屋、山王町および太子周辺の呼称。あいりん地区とも言う）に行き当たる。約0.62 km<sup>2</sup>の面積のこの地区にはホームレス生活者が500～600人、居宅保護世帯が約8500世帯、2010年国勢調査では約22000人が居住する全国一の人口過密地域である。ホームレスと呼ばれる居所を持たない多くの人々（以下、ホームレスとする）がこの限られた地に集住するに至った経緯は次節で述べる。

ホームレスには精神障害を抱える人の割合が一般人口よりも高いことが知られている。海外では1996～2007年の欧米諸国の研究論文のメタ解析（Fazel, 2008）で、統

合失調症などの精神病状態と診断されるホームレスは2.8～42.3%、うつ病は0.0～40.9%、パーソナリティ障害は2.2～71.0%、アルコール依存は8.5%～58.1%、薬物依存は4.7～54.2%という結果が示され、いずれも一般より高い傾向である。わが国でも古いところでは東京市内（当時）の浮浪者（原文ママ）のうち85.5%が精神障害者であったとの報告がある（村松, 1942）。上野の浮浪者（原文ママ）についてはその割合が97%にも上っていた（藤原, 1980）。最近では森川ら（2011）が東京都のホームレス80名に面接調査を実施したところ、そのうち62.5%に精神疾患ありの診断がつき、31.6%が過去に自殺未遂歴を有していた。逢坂ら（2003）は大阪市でホームレスの死因を分析し、自殺が16%と一般男性よりも高いことを明らかにしている。精神疾患の診断がつかないまでも精神

2015年9月7日受付 2015年12月25日受理

<sup>1)</sup> 大阪市立大学医学部看護学科

<sup>2)</sup> NPO法人釜ヶ崎支援機構

\* 連絡先：

的不健康な状態を表すGHQ得点が高い人が多いことは、国内外の研究で明らかとなっている（Fischer, 1986, Holland, 1996、吉住, 2013）。

またホームレスの知的障害者率の高さも古くから報告されている（高橋, 1959、藤原, 1980）。最近でも2010年の東京都心部、2015年の名古屋市内で実態調査が行われ、都市部のホームレスの3割に知的障害の疑いがあることを報じられた（朝日新聞2010年5月17日、共同通信社2015年6月13日）。Nishioら（2014）の研究でも40%に中等度～重度の知的障害を認めている。

発達障害との関連も注目されており、Larry.G（2010）は60名のホームレス中52名（86.7%）が何らかの発達障害を有していたと報告している。藤原（1980）は、浮浪（原文ママ）となる動機として最も多いのは失職であるとしており、職を失う主な理由は「職場でのけんか」、「上司と合わないこと」としている。これらはいずれも発達障害に多く見られる対人コミュニケーション上のトラブルや、そこに至るまでの極端なこだわり、不注意による業務上のミスなどが関係していると考えられる。そのほかに「酒で失敗」、「賭けごとで借金」といった失職理由が挙げられているが、こうした依存性障害を想起させる状況の背景には、ADHD（注意欠陥多動性障害）などの発達障害やパーソナリティ障害による生きづらさや孤独感を抱えていることが多い。

ここまで述べたような障害を有する人々の多くは、幼少時から異質な者として排除されたりいじめに遭うといった経験を持ちやすく、その影響でますます対人関係から遠ざかり、社会生活技能を習得する機会が乏しいまま成人となっているケースが多いと想定される。そのため、学校や職場、家庭でさえも自分の居場所を見いだせず、社会の辺縁で生活をせざるを得ない状態に追いやられがちである。実際、現在筆者が活動している釜ヶ崎地区にもそのような経緯からこの地域に流れてきた人が散見される。こうした社会的技能の不足による生活のしづらさを改善し、他者との適切な関係性を構築する手段として、精神保健医療の現場では社会生活技能訓練（Social Skills Training、以下SST）が行われている。精神障害や発達障害を抱える人が多い釜ヶ崎のホームレスにおいても同様に社会生活技能を向上させ、対人コミュニケーションの改善を図ることを目指し、その導入を検討していたNPO釜ヶ崎支援機構（以下、支援機構と略す）と筆者との協働により、2012年8月から同地区で生活保護を受給している单身生活のホームレス経験者を対象にSSTを開始した。SSTの対象、内容等詳細については後で述べる。

## II. 釜ヶ崎地区の成り立ち

ここで改めて、なぜこの地区が現在のような様相を呈するに至ったのかについて歴史をふりかえりたい。

1945年3月の大阪大空襲で釜ヶ崎の街は灰燼に帰した。敗戦後は闇市・バラックからの出発で、戦災被害者が集住するとともに、全般的な失業状況から釜ヶ崎に都市雑業を求める人口の流入があった。1950年に朝鮮戦争が始まると港湾荷役業務の増大が日雇求人の増加をもたらした。釜ヶ崎は活況を呈すようになる。高度経済成長を背景に港湾労働・建設土木の労働力の急激な需要増から敗戦直後は4千人台だった釜ヶ崎の日雇労働者とその家族の人口は、1万人に達した。この激しい変化は、石炭から石油へ産業構造を切り替えるために労働力の移動が国策により図られたことと農村の労働力が流動化し都市に流入したことを背景にしていた。

戦後、行政施策の空白地帯だった釜ヶ崎は、1961年の第一次暴動によって市民社会から再発見されたと言われる。更生・福祉といった観点から、女性・子ども・世帯をもつ男性に、釜ヶ崎の外での公営住宅の提供や生活保護の適用が行われるようになった。当時、関西経済界は1970年の大阪万博を控え、インフラ整備のために建築・土木に携わる労働力を確保する必要があった。需給を容易に調整しうる労働力のプール基地、裏を返せば単身の男性労働者が失業すればすぐに使い棄てられる街として、釜ヶ崎は作りかえられていく。現在のあいりん総合センターを中心に一時に2,000人規模で相対求人が可能な巨大寄場が国・府・市の共同により政策的に作られていった。

オイルショックにより急激に求人が減少した時期を除き、91年のバブル崩壊までは、求人数は右肩あがりに増大していった。民生対策としては70年に大阪社会医療センター、71年に市立更生相談所が設立された。後者は釜ヶ崎の日雇労働者だけに特化した福祉相談窓口だった。市24区以外の、25番目の「福祉事務所」である。失業のため野宿をしても年末年始の臨時宿泊所以外、単身の日雇労働者には対策がなく、疾病や怪我の場合医療センターの受診や入院・施設保護の措置がとられるのみであり、野宿と入退院を繰り返して、やがて行路死または行旅死亡に至っていた。「浮浪」「怠惰」「犯罪」に流れやすいと見做されてきた日雇労働者やホームレスの人々は、社会福祉の外に置かれていたのである。

バブル経済がはじけると釜ヶ崎の日雇（現金）求人数は最盛期の180万人台から、90～100万人台へと半減する（公益財団法人西成労働福祉センター；2014）。このとき

失業からホームレスに追い込まれた多数の日雇労働者が、テント・小屋掛けでの生活を公園や河川敷等とするようになり、釜ヶ崎とその周辺に囲われていた野宿問題が、急速に社会問題となっていた。野宿に追い込まれた労働者が、地域の労働組合・宗教団体を中心とした呼びかけに集まり、府庁・市庁前で野営やあいりん総合センターの夜間開放に取り組み、ホームレス＝失業の問題であることを訴えた結果、ホームレス＝「浮浪者」「怠惰」「好きでやっている」という偏見を越えて、1994年より、あいりん総合センターでの相対求人から排除されやすい55歳以上の高齢日雇労働者を対象とした特別清掃という就労対策が開始された。

また2008年のリーマンショックによっても、釜ヶ崎では求人数がさらに激減（最盛期の6分の1）した。東京の年越し派遣村のインパクトがあって、2009年の厚生労働省通知によりホームレス生活者にも居宅保護への門戸が開かれたことから、生活保護による包摂が急激な前進を見せた。

現在の釜ヶ崎では、居宅保護により畳の上にあがることができた人の孤立の問題とさまざまな理由から生活保護の利用を希望しない人が路上に500～600人規模で残っている問題とそれらを含み急速に進んでいる高齢化にいかに取り組みかが課題となってきた。2015年にNPO法人釜ヶ崎支援機構が、特別清掃の登録者とシェルター<sup>1</sup>利用者に対してほぼ悉皆的に実施したアンケート調査によれば、「生活保護（居宅保護）を申請するときに思うこと（複数回答可）」として、「働いた収入で暮らしたい」と回答した者が特別清掃登録者で27.4%、シェルター利用者で31.1%と、両対象において最も多かった。また「現在、仮に仕事ができるとすればどのような仕事をしたいか。あるいはどのような仕事ならできると思うか（複数回答可）」に対しては、清掃作業等の軽作業を答える傾向が強く、「（仕事が）できない」と答えたものは、特別清掃登録者で5%、シェルター利用者で15%にとどまり、雇用に吸収されにくい現状はあるものの、年齢を重ねてもホームレスの就労意欲は決して低くなく、社会とのつながりを求めていることが伺えた。

- 1 大阪市からの委託による夜間宿所運営事業により、野宿を余儀なくされる労働者に提供される1,040人分の臨時夜間緊急避難所としての寝場所のこと。

### Ⅲ. 釜ヶ崎地区在住のホームレス経験者に対して SSTを行う理由とその目的

社会生活技能とは、我々が日常生活を送る中で個人に

与えられる社会的刺激を受け取り（受信）、状況に応じて刺激の意味を評価・判断（処理）し、社会的に認められる形で、あるいは自身が納得いく形で考えや感情を表現する（送信）という三つの構成要素から成る。SSTは社会生活技能訓練（Social Skills Training）の略で、受信、処理、送信の社会生活技能を個々の必要性に応じて構造的に訓練する認知行動療法の一つである。無意識のコンプレックスや心理的葛藤を処理するのではなく、状況に対する不適切な条件反射（受信、処理、送信）を消去し、適切な条件反射を獲得すること、つまり認知と行動を変えることを目指し、数名の参加者が一定のルール、進行方法に従って一緒に訓練する。SSTは、統合失調症患者に対する薬物療法と両輪をなす心理社会的治療の一つとして、その有効性が各国で認められ（Corrigan；1991, Kurtz, Mueser；2008, 奥ら；2014）、我が国には1988年に紹介され、1994年に診療報酬化されて以降精神保健医療を中心に広く普及してきた。発達障害者に対しても、会話の仕方（Koegel, Frea；1993）や怒りのコントロール（Moon, Eisler；1983）など多岐にわたって効果を示している。最近では精神保健医療分野以外の矯正施設、教育、一般企業などでも個人をエンパワメントする手段として行われるようになっていく。

エンパワメントについては、社会学的にマイノリティ集団や女性、子どもなど弱者に対するものというイメージが強く、40歳代以上の中高年男性が中心の釜ヶ崎のホームレスやその経験者、しかも自らの意思でそこにいると捉えられがちな人々への取組みとなると、その必要性を疑問視する人がいるのも否めない。しかしながら日本のホームレスは、エンパワメントを育む資源として挙げられている生活空間、余暇時間、知識と技能、適正な情報、社会組織、社会ネットワーク、労働と生計を立てるための手段、資金（フリードマン；1993）の多くを剥奪されている。少なくとも1）生活空間は不安定で、2）労働と生計を立てるための手段、資金がなく、3）家族と疎遠となり社会的に孤立し、社会ネットワークは乏しくなり、4）余暇時間を楽しむ余裕もない。山田(2013)は、ホームレスを経験した生活保護受給者の多くがホームレス状態を解消してアパート生活に移行してもなお、社会的必需項目を剥奪されており、なかでも3）と4）に当たるサポートネットワークや地域での活動からの排除率は一般の人々の約3倍と高いことを明らかにしている。

釜ヶ崎地区住民の社会ネットワークとしては、先にも示した2015年のアンケートで調査「日頃身近な人々とのつきあい」の有無を問うたところ、「ある」と答えた率は特別清掃登録者では66.5%、シェルター利用者では



62%という結果を示した。一見すると両者とも6割以上が他者との付き合いを持ち、社会的ネットワークを失っているとは考えにくい。しかしながら「ある」と答えた者に対して、さらに付き合いの程度を問うと表1に示したように十分ではないことが伺える。特別清掃登録者では「立ち話をする程度」33.1%、「あいさつをかわす程度」26.2%が回答の上位を占めた。シェルター利用者では「立ち話をする程度」57.8%、「あいさつをかわす程度」34.4%で回答頻度の順位は両者共通していた。仮に「あいさつをかわす程度」「立ち話をする程度」「よく顔をあわせるが、深く立ち入らない」を孤立に近い層、「簡単な頼みごとや物の貸し借り、おすそわけなどをする」「困りごとの相談をしたり、助けあったりする」「共通の話題や趣味について話をしたりする」を孤立していない層とするならば、「日頃身近な人々とのつきあい」が「ある」と答えた者も、そのうち半数以上は表面的なつきあいにとどまり、社会的ネットワークの観点からはより孤立状態に近いと捉えることができる。

表1. 日頃の身近な人々との付き合いの程度

	特別清掃 (N=393)	シェルター (N=64)
	回答数	回答数
1. あいさつをかわす程度	103	22
2. 立ち話をする程度	130	37
3. よく顔をあわせるが、深く立ち入らない	86	12
4. 簡単な頼みごとや物の貸し借り、おすそわけなどする	58	12
5. 困りごとの相談をしたり、助け合ったりする	54	11
6. 共通の話題や趣味について話をしたりする	98	21
7. その他	2	6
合計	531	121

釜ヶ崎地区内のシェルターには、一日300人から400人のホームレスが緊急の寝場所を求めて宿泊している。1室100人の大部屋に2段ベッドという施設の構造であるため、宿泊者は互いに気を遣いながらルールを守っている。喧嘩などのトラブルは減多におこらない。シェルター利用者の平均年齢は60歳である。60歳を超えたホームレスの人々は、若年ホームレス生活者と比べ、働いてきた経験が長く、一定の人生経験を積んでいるため、社会性が比較的高く、コミュニケーション能力を培ってきたと評価することもできる。反面、それは釜ヶ崎で暮らしていくため身のこなし方（＝釜ヶ崎に特化した社会生活技

能）を学んでいるに過ぎず、エンパワメントにつながるほどの社会的ネットワークを豊かにもってはいないと見られることもできる。

一方、若年のホームレス生活者やホームレス経験者は、冒頭で述べたように精神障害や発達障害、幼少時の被虐待・いじめられた体験を有する者が特に多い。そして就労経験がほとんどないか少ない、あるいは短期の仕事を断続的に続けるしかなかった者が多く、より社会生活技能が低く社会ネットワークも乏しい傾向がある。このように釜ヶ崎のホームレスそれぞれの年齢や経験等によって社会生活技能や社会ネットワークの乏しさには様々な状況がある。

筆者らが実践しているSSTの目的は、社会生活技能をそれなりに有しているのならばトレーニングする機会を通じてより活性化し、スキルがないまたは乏しいのであれば、互いに学びあう機会を作り、生活と社会関係の安定につながる能力を培いエンパワーし、社会的ネットワークを広げていくことである。

#### IV. 釜ヶ崎でのSSTの実際

次に、今年4年目に入ったSST活動の実際を、3つの時期に分けて紹介する。第1期は生活保護を受給しながら就労を目指すもののなかなかそこに結び付かない、あるいは就労しても何らかの原因で長続きしない比較的若い世代を対象にSSTを行っていた時期、第2期はSSTを西成区単身高齢者生活保護受給者の社会的つながりづくり事業（ひと花プロジェクト<sup>2</sup>）のプログラムの一つとして実践した時期、第3期はひと花プロジェクトの参加者グループの形態が釜ヶ崎に適応する形で変化した時期である。それぞれの時期におけるSSTの参加者、目標、方法、参加者の反応について述べる。

2 2013年7月よりあいりん地域にて単身高齢生活保護受給者の社会参加、および生活支援プログラムを行う事業として始まった。

##### 第1期（平成24年8月～平成25年8月）

支援機構職員が若年ホームレスの社会生活技能の乏しさを改善する方法を模索し、筆者とともに初めて釜ヶ崎地区のホームレス経験者を対象にSSTを始めた時期であり、ホームレス経験者に受け入れられるのか、適切な方法であるのか分からない状況であった。

【参加者】相談のため支援機構を訪れた、生活保護を受給しながら再就労を目指す単身の若年ホームレスやその経験者（20歳代～50歳代）のうち支援機構職員の勧めに

応じた人、支援機構職員、ボランティア（他施設の看護・福祉職従事者）、看護・福祉系大学生などの見学者。1回の参加者平均6名、のべ126名。

【目標】必ずしもホームレスやホームレス経験者（以下、当事者とする）がこの場で対人コミュニケーション上の問題を解決することを目指すわけではなく、むしろ当事者自身の思いや感情を表現する体験、他者に話を聞いてもらい、認められる体験を持つことでSSTに馴染み、実践を継続することを目指した。

【内容】月に2回、当事者のうち日雇い労働や作業所の活動を持つ者も参加しやすいよう土曜日の18時から開始するよう時間を設定した。会場は、三角公園<sup>3</sup>近くの支援機構事務所2階の会議室とした。会場は、机を片付け、椅子だけを円形に並べ、互いの顔が見えるように着席する設定とした（図1）。

- 3 正式名称は「萩之茶屋南公園」といい、仕事にあぶれた労働者やホームレスが多く集い、毎週土曜日には炊き出しが行われる。



図1. ひと花センターでのSST実践の様子

SST基本訓練モデルは表2の手順で行われる。本稿のSSTもこの流れに従っていた。はじめに筆者主導で10～15分程度簡単なゲームやクイズなどでウォーミングアップをし、その後SSTのセッションを始めた。進行を務めるリーダーがSSTについて説明したあと、会場に掲示してある「SSTの進め方」「SST参加のルール（表3）」「よいコミュニケーション（表4）」の項目を順に参加者が1つずつ読み合わせた。リーダーは筆者、支援機構職員またはボランティアが務めていた。

参加者の1名が課題提供者として対人コミュニケーション上の困りごとを挙げ、その場面を課題提供者を含む参加者数名がロールプレイによって再現する。このロールプレイにおいて課題提供者のよかった点や改善策を中心に参加者間で意見交換する。いくつか出た改善策の中から課題提供者は自分が取り組みたいと考えた実践

表2. SSTの進め方（基本訓練モデル）

1. 練習することを決める
2. 場面を作って1回目の練習をする
3. よいところをほめる
4. さらによくする点を考える
5. 必要ならお手本を見る
6. もう一度練習をする
7. よいところをほめる
8. チャレンジしてみる課題を決める
9. 実際の場面で実行してみる
10. 次回に結果を報告する

表3. SST参加のルール

1. 見学はいつでもできます
2. 嫌な時はパスできます
3. 人のよいところをほめましょう
4. よい練習ができるように他の人を助けましょう
5. 質問はいつでもどうぞ
6. トイレ、タバコはちょっと断ってから
7. ここで話したことは他には漏らさない

表4. よいコミュニケーションのポイント

1. 視線を合わせる
2. 手を使って表現する
3. 身を乗り出して話をする
4. 明るい表情
5. はっきりと大きな声で話す
6. 話の内容が適切

可能な意見を取り入れ、その場で練習をする。課題提供者が希望すれば、改善策を出した参加者がまず見本となるロールプレイを示す。それを参考に課題提供者が新たに習得したコミュニケーションパターンをロールプレイによって練習する。課題提供者は実際の場面でこのコミュニケーションパターンを試すことを宿題として持ち帰り、次回のSSTでその結果を報告する。毎回1～2課題ずつ取り上げてSSTを実践していた。

課題は、社会生活を送るうえで日常的に誰もが体験しうる対人関係上の困り事であった。参加者がその時抱える悩みや過去に躓いて未解決のままの事柄が挙がり、当事者が比較的若い就労世代ということもあって職場での話題が多かった。例えば「盛り上がっている大勢の仲間になどにどのように話しかけて入っていくか」、「仕事中にやたらと話しかけて邪魔をする同僚にどう対応するか」、「宴会の場で上司からの酒の勧めを断る方法」などが課題となった。当事者だけではなく、社会で働き生活する者として支援機構職員や筆者を含めたボランティアも時には自らの課題を提供し、立場を問わず同じ目線で皆が話し合えるようにした。

セッション後は参加者同士が感想を述べ合い、全員で茶話会を楽しんでから終了となる。ウォーミングアップ

からここまで概ね1～1.5時間程度であった。

参加者を固定せず出入り自由なオープングループとし、気楽な体制をとっていた。当事者としては4～5名参加し、そのうち3名は毎回必ず参加する常連となった。【参加者の反応】参加者の多くは「自分だけが悩んでいると思っていたが、みんな同じだと分かった」、「自分一人では思いもつかない方法を他の人は使っていることが分かり、勉強になった」、「意識していないところを褒めてもらえて嬉しかった」など、他者との関わり無くしては得られない感想を語っていた。これは当事者に限らず、ボランティアや支援機構職員からも同様の声が上がった。回を重ねるごとに感情的で攻撃性の強い発言が目立っていた当事者からは内省的な言葉や他者を尊重する意見が聞かれるようになり、自閉的だった別の当事者は緊張しながらも自己主張できるように変化していった。

## 第2期（平成25年8月～平成27年4月）

ホームレス経験者が中心である単身高齢生活保護受給者を対象とするひと花プロジェクトのプログラムの一つとしてSSTを行うことになり、参加者の多くが若年世代から65歳以上のひと花センター<sup>4</sup>利用者（以下ひと花メンバー）に変わった時期である。第1期SSTの参加者であった若年当事者はピアサポーターとして2名が継続参加していたが、就労時間との重複により徐々に参加する機会が減っていった。

4 ひと花プロジェクトの拠点となる施設。このセンターでほとんどのプログラムが行われている。

【参加者】ひと花メンバー、若年当事者、ひと花センター職員、支援機構職員、ボランティア、地域の子ども、見学者等 平均11.2名（うちひと花センター利用者平均6名）、のべ393名。

【目標】第1期のSSTに馴染み継続させることは達成したため、本来のSSTの目的である、対人コミュニケーション上の問題を解決し、社会生活技能を少しでも改善することを目指すだけでなく、ひと花メンバーが人生の先輩として自尊感情を高められることと、第1期から継続参加している若手当事者がピアサポーターとして何らかの役割を担い、自己効力感を得られることを目標とした。

【内容】ひと花センター開館時間の都合上、月2回土曜日の16時から18時と時間を繰り上げた。このため一部の若年当事者は参加が困難となったが、時には近所の小中学生らも顔を出すようになり、思わぬ世代間交流の場もなっていた。グループの名称は、ひと花メンバーの話し合いによって「人付き合いの困り事をみんなで考える会」とし、SST自体は第1期と同様にオープングルー

プの形で継続した。参加者が高齢者中心のひと花メンバーとなったため、介護予防の意味合いも含めてウォーミングアップを重視し、身体や頭を使うゲームを積極的に取り入れた。例えばジェスチャーゲーム、脳トレ、サイコロトークなど、筆者やボランティアだけでなく若年当事者もリーダーシップをとって進行する回を持った。また若年当事者が初参加者にSSTのルールや流れを説明するなど、意識的にピアサポーターとして活躍する機会を設けるようにした。

第2期で取り上げたSSTの課題は、参加者が単身高齢者となったこともあって、第1期のように職場がらみのものよりも「近隣住民の飼い犬への苦情を言う」、「新聞の勧誘を断る」、「少量の魚の処理をスーパー店員に依頼する」など、地域で生活するなかで誰もが抱えやすいコミュニケーション上の困りごとが挙げられた。また対人関係以外の問題、例えば「スーパーでお金を遣いすぎる」、「酒を飲みすぎる」など単身生活で直面する個人的なテーマについても話し合うようになった。過剰なアルコールやギャンブルは複数の参加者が抱えている問題であり、これが釜ヶ崎で暮らす人々に対する一般社会からの偏見を深める要因ともなっている。それを認識している参加者は自分のこととして真剣に意見交換していた。ひと花メンバーはホームレス経験者とは言え就労期間が長く、社会性も比較的高い。このプログラム以外にもひと花センターで様々な作業やレク活動をし、自己表現する場を持っている人が多い。そのためSSTのロールプレイにも抵抗感なく取り組んでいた。

1年経過したころより、ひと花メンバーからSSTの課題として取り上げるような困りごとが挙がる頻度は少なくなり、見学学生やボランティアの困りごとを取り上げて、人生の先輩からの意見としてひと花メンバーにアイデアを乞う形か、SSTの体をなさず自助グループのような、しゃべりたいことをしゃべる場という様相を呈するように変化していった。話題としては「お金がない」「血圧が下がらない」や昭和の映画や芸能人の話など参加者に共通した関心事など皆が口を出せるものが自然と挙がっていた。

【参加者の反応】第1期の若年当事者と同様の感想が語られることが多いが、ひと花メンバーには「ここに来なければ誰とも言葉を交わすことなく一日が終わる」という人も少なくない。一方、「人付き合いの困りごとは仕事をする上で、必要に迫られて気の合わない人や関わりたくない人と関わるから出てくるものであり、仕事を引退した高齢のひと花メンバーは気の合わない人とはそもそも付き合わず、困ることもない」という声も出るよう



になった。ただ、「楽しかった」「勉強になった」という感想は多く、SST実践よりも皆が集まることに意義を見出している様子が見ええた。

### 第3期（平成27年4月～現在）

第2期の後半以降の、SSTの課題となるコミュニケーション上の困りごとが殆ど挙がらなくなり、自助グループのような形で維持している時期で、現在も続いている。

【参加者】第2期とほぼ同じくひと花メンバー、若年当事者、ひと花センター職員、支援機構職員、ボランティア、地域の子ども、見学者等が参加し、参加者の固定化が進んでいる。平均11.4名（うちひと花センター利用者平均6.8名）である。

【目標】この時期は、課題が挙がりづらくなっていることを踏まえて、今後の会のあり方を参加者主体で考えること、新規の人が継続して参加できることを目標としている。

【内容】参加者が集まってもSSTが行われない状況を踏まえて、筆者から参加者に対し、今後の本プログラム継続の要否、あり方についての議論を持ちかけたところ、プログラムの存続を望む声が多かった。その一方、「人づきあいの困りごとをみんなで話し合う会」という名称が実際の活動にそぐわない違和感を持つ人も少なからずいたため、名称を「人楽会」に変更した。この新名称は参加者らの話し合いの結果、人づきあいには困りごと、しんどさはつきものではあるが、それも含めて楽しもうという趣旨で決められたものである。第3期になり実施回数は月1回に減り、開催時間は15時～17時とさらに繰り上がったため、参加できる若年当事者は1名のみとなっているが、ひと花メンバーは毎回6～7名が参加している。間隔が開くぶん、参加者の話題も溜まっており、毎回様々な時事ネタ、思い出話を、時々怒鳴り声も交えながらあだこうだと話し合い、誰かから困りごとを持ちかけられればSSTを実施するという形で、皆が自由に発言できる場となっている。

## V. 今後に向けて

釜ヶ崎地区のホームレス経験者の多くは、年齢を問わず様々な障害やその他の複雑な背景により、対人関係における困難や苦手意識、考え方の偏りによる生活のしづらさを抱え、職や家族、家も失っている。釜ヶ崎に限局したコミュニケーションなら何とかなくても、他ではなんとなく浮いてしまうのを自覚するため自信を持てず、自己を否定的に捉えやすい。そうした人々がSSTによっ

て他者の提案により新たなコミュニケーションパターンを獲得したり、本来持つ強みを生かせるようになれば少しずつ自信を回復できる。また提案した側も自己効力感を得てさらなる意欲を持てるようになる。しかし、ホームレスやその経験者を対象としたSST実践は報告がなく、その有効性は今後検証が必要である。「ホームレス状態からの自立の過程において、地域社会（近隣）、職場、NPO関係者との付き合いが多い人ほど社会への信頼感、生きる意欲が高い傾向があるといわれ、こうした社会関係を築き、保つためにはコミュニケーション力は欠かせない（古賀；2015）」ものであるように、SSTによってもたらされるコミュニケーション力の向上は、単に他者との関係を改善するだけに留まらず、生活そのものを豊かにする可能性も秘めている。

4年目に入る本SSTプログラムは、支援に当たる側の認識にも少なからず影響していると考ええる。こちらでも検証が必要ではあるが、こうした活動に身を置くことで、支援機構スタッフやボランティアらはホームレス経験者の潜在力や自分の無力さに気づき、むしろ支援する側がエンパワーされる印象を受ける。支援者・被支援者双方が立場に関係なく相互に認め合い、人としてより成長していける場、すべての参加者がここに来れば「一人ではない」、「誰かが何かを言ってくれる」、「誰かの役に立てる」と感じられる、柔軟で温かい居場所を第4期、第5期と長く継続できるよう、行政等に働きかけていく必要があり、その論拠となるエビデンスを定性的、定量的に集積する必要がある。また、本活動の当初の対象者であった、高齢者よりもさらにコミュニケーションに困難を抱える若年世代のホームレス経験者に対するSSTを再開できるよう、社会的意義を明らかにすることが急務であると考ええる。

## VI. おわりに

特別な人が住む特別な場所として見られがちな釜ヶ崎地区で、ホームレス経験者に対して精神保健活動として実践しているSSTについて、釜ヶ崎地区の歴史やそこに居住する人々の背景を含めて報告した。様々な障害などにより、社会生活に困難さを抱え、ここで生活せざるを得なくなったものの、その多くはかつての日本経済の底辺を支えた人々である。彼らが自己肯定感と人が有する当たり前の権利を取り戻し、社会的に孤立せず他者と関わりながらもうひと花咲かせられるよう本活動を継続するとともに、ここで行うSSTの社会的意義を検証し、さらに発展させることを目指したい。

## 参考・引用文献

- 網野善彦 (2005) ; 日本の歴史をよみなおす, 筑摩書房.  
朝日新聞 ; 2010年 5月17日
- Corrigan PW (1991); Social skills training in adult psychiatric populations: a meta analysis. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry* 22: p203-210, 1991
- Fazel Seena, Vivek Khosia, Helen Doll, et al. The Prevalence of Mental Disorders among the Homeless in Western Countries: Systematic Review and Meta-Regression Analysis. *PLoS Med.* 2008 Dec; 5(12): e225: p1670^1681
- Fischer PJ., Shapiro S., Breaky WR., et al (1986). Mental health and social characteristics of the homeless: A survey of mission users. *American Journal of Public Health*; 76: p519-524
- 藤原豪 (1980), 浮浪. 現代精神医学大系23A, 中山書店.  
原口剛, 白波瀬達也, 平川隆啓 (2011), 他 ; 釜ヶ崎のススめ, 洛北出版.
- Holland AC.(1996), The mental health of single homeless people in Noethampton hostels. *Public Health*; 110: p299-303
- ジョン・フリードマン著, 定松栄一, 西田良子, 林俊行 訳 (1995) ; 市民・政府・NGO—「力の剥奪」からエンパワメントへ, 新評論.
- 釜ヶ崎資料センター (編) (1993) ; 釜ヶ崎 歴史と現在, 三一書房.
- 河合正好 (2015) ; 統合失調症の社会機能訓練とその効果を高める新たな試み, 常葉大学保健医療学部紀要 6巻1号 p7-15.
- 公益財団法人 西成労働福祉センター (2013) ; 西成地域 日雇労働者の就労と福祉のために 第52号2013年度事業の報告, 公益財団法人 西成労働福祉センター.
- 古賀弥生 (2015) ; 演劇によるホームレスのためのコミュニケーション講座の実践と検証, 活水論文集文学部編 58, p123-147.
- Koegel, R. L., Frea, W. D.(1993), Treatment of social behavior in autism though the modification of pivotal social skills. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 26, p369-377
- Kurtz MM, Mueser KT (2008); A meta analysis of controlled research on social skills training for schizophrenia. *Journal of Consulting and Clinical Psychology* 76: p491-504.
- 共同通信社 ; 2015年 6月13日
- Larry.G. Morton II, Renee M. Cunningham-Williams, et. al (2009); Volunteerism among homeless persons with developmental disabilities, *Journal of Social Work Disabil Rehabil.* 9(1): p12-26. doi: 10.1080/15367100903526070.
- 森川すいめい, 上原里程, 奥田浩二, 他 (2011) ; 東京都の一地区におけるホームレスの精神疾患有病率, 日本公衆衛生雑誌, 58第5号 ; p331-339.
- Moon, J. R., Eisler, R. M.(1983); Anger control: An experimental comparison of three behavioral treatments. *Behavior Therapy*, 14, p493-505.
- 村松常雄, 松本肇, 齊藤徳次郎 (1942) ; 東京市内浮浪者及び乞食の精神医学的調査, 精神神経学雑誌46巻(2) : p69-92
- Nishio Akihiro, Yamamoto Mayumi, Ueki Hirofumi, et al (2014); Prevalence of mental illness, intellectual disability, and developmental disability among homeless people in Nagoya, Japan: A case series study, *Psychiatry and Clinical Neuro sciences*, doi: 10.1111/pcn.12265. p1-9.
- 逢坂隆子, 坂井芳夫, 他. 大阪市におけるホームレス者の死亡調査. 日本公衆衛生雑誌50巻(8) : p686-695
- 奥智也, 古屋敷綾浩 他 (2014), SSTプログラムが統合失調症患者に与える影響. 中国四国国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌 9 : p245-248.
- 大阪朝日新聞1910年 2月4日
- 皿田洋子 (2008) ; 心理社会的治療としてのSST, 日本社会精神医学会雑誌, 17巻1号, p62-67.
- 鈴木亘 (編), 原昌平, 福原宏幸, 他 (2013) ; 脱・貧困のまちづくり 「西成特区構想の挑戦」, 明石書店.
- 高橋芳和 (1959) ; 浮浪者の社会精神医学的調査研究, 矯正医学 8 (4) ; p52-63.
- 畝川鎮夫 (1926) ; 大大阪独案内, 海事彙報社.
- 山本真也, 香美裕子, 他 (2013) ; 高機能広汎性発達障害者に対する就労に関するソーシャルスキルの形成におけるSSTとシミュレーション訓練の効果の検討, 特殊教育学研究 51(3) p291-299.
- 吉住隆弘 (2013), ホームレスの精神的健康とソーシャルサポートの関連. 中部大学人文学部研究論集 (30) ; p37-48